
ゴーストスイーパー横島 極楽大作戦R!!

スイショウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴーストスイーパー横島 極楽大作戦R！！

【Nコード】

N9679Y

【作者名】

スイシヨウ

【あらすじ】

美神令子嬢 美神除霊事務所所長。この業界ではトップクラスの実力の持ち主である。横島忠夫 美神除霊事務所に所属するアルバイト所員。荷物持ち兼丁稚兼高校生。この業界では、いや業界を超えてトップクラスの 女好きである。そんな彼の物語。

この小説は原作とは微妙なズレを生じさせたいわゆる再構成モノです。シリアス度は低めになっております。

arcadia様でも掲載中です。

漢（オトコ）の決意

命とプライド、どちらを取るか。

命と金、どちらを取るか。

ためらう事なく即答しよう。

命の方が大事に決まっていると。

しかし、だがしかし！

命と女。ならばどうだ？

ただの女ではない。綺麗なねーちゃんだ。ムチムチプリンの極上なねーちゃんだ。

しかも！ しかも相手は尽くすタイプだと言っている！ 出血大サービスだと言っているツ！！

この世に生まれ落ちて17年。ようやく訪れた我が世の春の前に、この熱く滾る情熱を抑えることなど出来ようか！？

答えは否。断じて否！！

「と、ゆーことで目の前に開かれた青春の門への誘惑に勝てなかったんやーっ！」

「何がとゆーことで、だ！ 毎度ながらいいように操られよってかにコイツは。」

しかも、今回は雇い主を生贄にしようなんてね。いい根性してるじゃないの横島くん？」

「かんにんや〜っ！ しかたがなかったんや〜っ！！ だってだって、あの女の幽霊が美神さんにとり憑いたら二人で幸せになれるってーっ！ なるうってーっ！！！」

「ええいッ！ 泣きつくな抱きつくな離れんかこのクソガキー！

「！」

「ああつ、お姉さまの良い匂い！ 美神さんってあつたかいなー！
やわらかいなーっ！！」

「ぶち殺すぞこのセクハラ小僧が！！」

私の名前は横島忠夫。平凡で善良な17歳の青少年。前途有望な
若者である。

異国へと旅立った両親の手を離れ一人日本に残った私は、一日も
早く自立した人間になれるように学業の合間をぬってはアルバイト
に精を出す日々を送っていた。

美神除霊事務所。それが私の職場である。

平時には平凡な学生として日々を過ごし、時が来れば人に仇名す
悪鬼悪霊を打ち払う正義のゴーストスイーパー！。

それが私のもう一つの顔だ。

折からのバブル景気、それに伴う地価高騰によって地縛霊の除霊
は超ボロい仕事となっていた。

一般人が住む場所にすら不自由し始めたこの国に、もはや幽霊で
あるうとも住まわせておく余裕はない。

そして、地縛霊に対する除霊への報酬が跳ね上がった影響か、除
霊という行為自体へ求められる報酬の相場も比例するように上昇す
る。

多くの霊能者、それに関係する者たちが莫大な利潤を生み出すソ
レへと群がり、除霊は一大ビジネスとなって瞬く間に世間へと広ま
っていた。

無論、おいしい話には裏がある。

富と言つりターンを得るために、悪霊相手に差し出すチップは己の命である。

これを高いと見るか安いと見るかは人それぞれであろうが、私に言わせればそんな物に命をかける彼らの気がしれない。

そんな強欲者たちの中でも一際異彩を放つのが私の雇い主であり目の前にいる人物、美神令子嬢だ。

燃えるような赤い髪と誰が見ても目を引いてしまう美しい容姿、抜群のプロポーションを惜しげもなく晒すボディコンに身を包んだ彼女は20歳という若さでありながら今や押しも押されぬ業界トップクラスの人物である。

勢いのままに彼女に抱きついてしまったが、私はこの程度で満足するような軟弱な男ではない。

いつの日か堂々とこの手で彼女とくんずほぐれ

「アンタねえ、本人を前にしてずいぶん好き勝手言ってくれるわね」

「ああっ！？ 心の声が口に出てたーっ！」

「それに誰が正義のゴーストスイーパーか！ アンタはただの丁稚でしょーが！！」

「ちょ、荷物持ちから丁稚に格下げっスカーっ！？」

「婦女暴行罪でブタ箱に放り込まれただけでもありがたいと思わんかー！！！」

「ブーツが！？ いつものハイヒールよりはましだけどブーツのヒールでもぐりぐりはやめて！ 愛が、愛が痛いーっ！」

『えーかげんにせんか貴様等ーっ!!』

俺が命を掛けて女体の神秘に挑もうとしていたところに野太いおっさんの怒声が響く。

開けてはいけない新しい世界への扉を開きかけていた俺にとつては助けにも似ていたが、美神さんが脚を振り上げる「スカートの中の絶対領域に近付けるといって究極の公式が成り立っていただけに恨めしさが募る。

どこのどいつだと声の出所を探れば、俺といっしょに幸せになるうと言った女の幽霊が居た場所だ。

そこにあの女の姿はなく、別の幽霊の姿があった。

いや、よく見れば見覚えがあるような。

「ハッ、やっぱりアンタがそうだったのね。化けの皮を剥がして本性を見せたわね鬼塚畜三郎!」

『ドやかましーわ! 黙っておいたらイチャイチャしおって!! イヤミか!?!』

殺されるまでの32年間、女つ気なんぞ全くなかったワシに対してのあてつけかーっ!!』

「なっ!?! 幸薄そうな出前のねーちゃんがあのおっさんになっただけっ!?!」

鬼塚畜三郎。

今回美神さんが受けた除霊物件。そこで起きていた霊障の元凶でありこの建物の主であった男の悪霊だ。

残忍非道で冷酷無比。10代で一大勢力を築き上げた犯罪組織のボス。

その最期は部下に裏切られて殺された、というものらしいが生前の経歴を見れば同情の余地はない。そんな男だ。

しかも、死後悪霊になつてまで人様に迷惑を掛けているようなしつこい奴だ。

そんな奴が相手なのだから、俺はてつきり問答無用でシバキ倒すのかなと思つていたら美神さんの考えは違つたらしい。

曰く相手が相手だけに噂や報告書なんてあてにならない。本人の言い分も聞いてやりましょう、と。

美神さんも後ろ暗い事ありますからね〜と言つたらシバかれた。

で、交霊術だか降霊術だか分からんがとにかくそーゆー術を使つて本人を呼び出したわけだ。

結果は真っ黒。

報告書や噂に嘘偽りはなし。本物の悪党だった。

何やら喚き叫びながら突っかかってきた鬼塚の霊を平然と踏みつけていた美神さんはスゴイと思う。

その場は逃げられてしまったが相手は地縛霊。この建物から外へ出る事はまずありえない。

長期戦になると見越した美神さんが相手の出方を見る為に俺を餌にした時には、正直はらわたが煮えくり返る思いであつたが、お願いをされたあの時の、お互いの顔を間近に寄せ合つたあの瞬間のトキメキの前には許してやらん事もなくはない。

さりげなく胸が当たっていた事も大きい。誘っているのか？俺を誘っているのか？

ゴチになりますと抱きしめら腹に強烈な膝蹴りを食らつた。しかし悔いはない。

そんなこんなで色々あつて冒頭に至るわけだが、改めて思い出したら腹が立ってきた。

「俺の純情を弄んだんだなコンチクショーーーーッ！！　ヨコシマパーンチ！！」

狙いは当然目の前の鬼塚だ。

美神さんに踏みつけられていた事を思い出せば、相手は柄が悪いだけで大した事はないはずだ。

そんなはずがあるわけがないのに。

相手は霊だ。人に害をなす悪霊だ。

生身の人間、それも一介の高校生、荷物持ち程度にどうこう出来るような相手のはずがない。

美神さんはプロなのだ。彼女はその中でも特別なのだ。自分など彼女の周りにいる有象無象の一人にしか過ぎないのに。

強いのは美神さん、弱いのは美神さん。目の前の悪霊が恐れたのも美神さんだ。俺じゃない。

悪霊は横島忠夫の存在など歯牙にも掛けてはいない。

俺は何を勘違いしていたのか。

「ゴフツ！？」

俺のパンチは鬼塚の身体をすり抜けて空を切る。それなのに、勢いのままに突き進む俺の身体は“鬼塚の霊体にぶつかって”弾き飛ばされていた。

「冗談じゃない。こっちの攻撃はすり抜けるのに相手の攻撃は当たるってどんな反則だ。」

「横島クン!？」

美神さんが俺の名前を叫んでいた。

ド素人の俺が、臆病な俺が見せたアホな行動は彼女にとって予想など出来るはずがない。

申し訳ない気持ちになりながら、怒っているだろうなと美神さんを見た。

いつも高飛車で妙な自信に満ち溢れて、自分やお金の事意外は屁とも思っていないであろう高慢ちきな女王様が、泣きそうになっていた。それは俺が見た美神さんの初めての表情だ。

見てはいけなかった、させてはいけなかった表情だ。

美神さんが持っていた霊体ボーガンを投げ捨てて飛び出した。

鬼塚の悪霊が俺を喰い殺そうと迫ってくる。

美神さんがスカートに陰に隠していたホルダーから神通棍を取り出して振りかぶる。

鬼塚が大口を開けて俺に覆い被さろうとしている。

間に合わないな、と冷静に状況を把握している俺がいた。

死に際の集中力だとか、走馬灯ってものは眉唾物だと思っていたがどうやら本当にあるものらしい。

俺の脳裏にこれまでの17年間がスクリーンに映された映像のよう流れっていく。

色鮮やかな場面もあればモノクロの場面もある。ノイズにまみれ

て何が何やら分からない場面もだ。

登場人物も多種多様。美神さんや親父やお袋、学校の友人や疎遠になった幼馴染、商店街のおっさんやエロビデオの女優さんもいる。けしからなくい込みのレオタード、いやビキニか？

そんな全くもってけしからん格好をした見知らぬ美女の姿もあれば、清楚な巫女さんやら褐色の肌の美女、十年後ぐらいに出会った少女や十年前に出会った美人さんの姿もあった。

犬のような尻尾を生やした少女、小生意気そうな少女、角を生やした女性に猿とかマザコンとかロン毛とか……

ちよつと待て。

いやいや、ちよつと待て俺の走馬灯。

明らかに“見た事もない、名前すら知らない美女たち”がいるのはどういふ事だ？ 男もいたよな気がするがそんな事はどうでもいい。

何だこれは？

俺はこんなにも美女に飢えているとゆーのに！

彼女ナシ17年の切ない生涯を終えようとしているのに！！

俺の走馬灯らしきモノは俺の見知らぬ美女たちに満ちているではないかっ!？

あり得ない！

理不尽だ!!

俺の走馬灯モドキっぽいモノの分際で、俺の知らない美女を侍らすとはいつたいたいどういふ見かっ!!

赦すまじ、俺の走馬灯みたいな何か!!

「ア、アカン！ そんなんアカン！！ まだ何にもしていないとゆーのに！！！」

必死だった。

「幻でもせめて一掴みーっ！」

次の給料日まで一週間の時点で所持金が三桁を切った時よりも必死だった。

失われていく桃源郷のねーちゃんたちを掴み取ろうと必死になつて手を伸した。

その手が 届いた。

美神さんの 胸に。

翌日、俺は白井総合病院のベッドの上にいた。

横では簡素な椅子に腰掛けた美神さんがなにやら書類の修正作業をしている。

あの後でいっただい何が起こったのか。俺にはきれいさっぱり記憶がない。

気がついた時にはベッドの上だった。

重症だったが後悔はしていない。悔いはない。

あの時確かに手にした乳の感触はいまだこの手の中にある。

この感触を覚えている限り俺はまだまだ進めるはずだ。

バレたらきつと殺されるので、この事は胸の奥に永久に封印しておこう。

そんな事をぼつつと考えていたら、美神さんが澄みきった笑顔で修正の終わった書類を俺に突き出していった。
雇用契約書と書いてある。

「横島くん？　“昨日から”時給250円ね」

「……………給料なんてどうでもいいです。一生ついていきます
おねーさま」

そうだ、悲しくなんてない。俺はやり遂げたのだから。
決してこめかみに井桁を貼り付けた美神さんの笑顔に、溢れ出る
黒いオーラに屈したわけではない。

命とプライド、どちらを取るか。

命と金、どちらを取るか。

ためらう事なく即答しよう。

命の方が大事に決まっていると。

しかし、だがしかし！

命と女。ならばどうだ？

ただの女ではない。綺麗なねーちゃんだ。ムチムチプリンの極上
なねーちゃんだ。

そして俺の勘は告げている！

このねーちゃんについて行けば、俺はきっとあの桃源郷に辿り着く事が出来ると！！

桃源郷が何なのか、自分自身さっぱり分からない！

だが、俺のことだから美人でエロくて可愛くて控えめで、それでも時々ふとしたことで

とにかく！

俺の勘が告げている。このねーちゃんから、美神さんから離れるなど！

当たり前だ！！

この横島忠夫、美人の為なら命など惜しみはせんっ！

でも、時給はもうちょっとなんとかありません？

駄目っスか？

薄い人

ゴーストスイーパー
GSの仕事、特にこの美神除霊事務所で行う仕事の大半は予約制だ。

依頼を受ける際にはまず相手の事を調べ上げ、次に依頼内容を注意深く確認し不備や偽り、誤情報が無いかを入念にチェックする。そうして依頼主の信頼性と依頼内容をクリーンにしてから仕事の準備に取り掛かるのだ。

物件への除霊であれば、その建物の成り立ちからそこに関わったであろう人々の事まで調べ上げ。

悪霊を掃う依頼であれば、例え気に食わない同業者であろうとも上手く利用して相手の情報を得る。

情報を得た後には必要となる道具を揃え、自身のコンディションを万全に持つて行く。

美神さんが仕事を行うという事は、つまりは絶対の勝算が有つての事。依頼を完遂できると確信するからこそ動くのだ。

自分の能力を過信せず、しかし過少せず。

綿密な計画をうち立てる繊細さと、時にはその計画すら覆して行動する大胆さ。

そういった様々な要素が若くして超一流と呼ばれる美神令子を形作っているのだ。

下手に失敗でもしてこれまで培ってきた評判や、莫大な違約金を払いたくない、と言うのが9割ぐらいは有ると思う。特に金。

そう、美神さんは金に厳しい。厳しいというよりもがめつい。そして微妙にセコい。

使う時にはパーっと使い、特に仕事がない時でも事務所に入り浸っている俺に昼飯を奢ってくれたり晩飯を奢ってくれたりするのに

仕事の報酬となるとホントに厳しくなる。

実際、これまでも依頼人と諸経費や報酬の件でトラブルになった事は多々あった。

その全てに美神さんは守銭奴と言っ言葉が温く思える様な悪辣な手を用いても勝利をもち取っていた。

背中をすすけさせた依頼人や、物凄い勢いで頭髪を失った依頼人の姿を俺は忘れる事はないだろう。多分。

アレか？ 提示された報酬の金額が自分自身の価値に繋がっているとでも思っているのか？

だとすればそれは 悲しい事だ。美神さんの価値はそんなモノでは計れないというのに。

その乳尻フトモモさえあればこの横島忠夫、例え火の中水の中。

行けと言われれば宇宙にすら行ってやるとゆるーのに！

そう、美神さんの乳尻フトモモは俺の

「俺のモンじゃーっ！！」

「わたしの乳尻フトモモはわたしのだーっ！！」

「ああっ！？ またしても口に出てた！？」

美神さんからの渾身のアックスボンバーを喰らってぶっ飛ばされる俺。

毎度毎度理不尽な虐待を受けているはずなのに、肌と肌が触れあえた事でどこか満足している自分に気が付き愕然とした。

「ち、違う！ 嬉しくなんてないっ！！ こんな事で満足したりなんてするもんかっ！ 俺は、俺はっ！っ！？」

「アンタはさつきから何をワケの分んないコトを言ってるの?」

ジト目で俺を睨む美神さん。

あ、なんだかちよつと……

「ん〜、やっぱり今日はこの辺にしておきましょうか」

「あ、それじゃあ今日は……もう予約も無いですね。てことは終了あがりっスか?」

さて、美神除霊事務所が行う仕事の大半は予約制ではあるが、必ずしもそれが必須であるというわけではない。

同業者への臨時のヘルプや緊急を要する依頼などが舞い込む事も多い。

美神さん的にはそういう臨時の仕事の方が色々美味しく好きなんだそーだ。

“足下見てふっかけられるからね〜。そーゆー輩って私の評判を知っていて、それでも来ているのよ? もー鴨がネギ背負って来たって感じ!!”

らしい。

ひでえ。

でも、こーゆー時の晩飯は豪華になる事が多いから俺としても歓迎だったりする。

時給250円。この現実を俺は心のどこかでなめていたかも知れん。今更ながらに。

「む、そうね。私の靈感にもこう、ピピッと来るものがないし」

眉間を押さえながら美神さんが呟く。

美神さんのこの靈感ってやつは意外と馬鹿に出来ない。

こと金銭に関する事に対しては。

「最近先生にも顔を見せてないし、丁度良いかな」

身体が半分以上埋まりそうな豪華な椅子に座っていた美神さんが立ち上がる。

ちなみに机はマホガニーとかいう超高級ブランド品らしい。

机なんてコヨの学習机とか学校の机みたいなもので十分じゃないかと思うのだが、こーゆー商売をしている以上、ある程度の見得やハツタリは必要なんだと以前美神さんがぼやいていたのを思い出した。

事務所内には俺には何が高級なんだかさっぱり分らない壺やら絵やらがたくさんあるしな。

都内のテナントビルの5階フロアを全て借りきって事務所にしているのもそーゆー事なのだろうか。

金持ちの考える事はよー分らん。

おやつとして置かれていた袋入りビスケットをいつものようにジージャンのポケットに入れながらそんな事を考えていた。
そんな時だった。

「横島クン今日この後暇？」

何だ？

今、何と言った？

この女は今、何と言った？

横島クン 俺の名前だ。君ではなくクンである所がポイントだ。
今日 トウゲザーだ。確かそうだはずだ。トウモロウだったよ
うな気もする。

暇 暇だ。時計を見ればまだ夕方の方の4時。確認したのはもちろ
ん事務所の時計でだ。腕時計なんて高級品を俺が持っているはずが
ない。

正直、こんな時間からボロアパートに帰ったところで時間を持って
余してしまうだけだ。

唯一の楽しみであるAV観賞をしようにも昨日返却したばかり。
新たに借りる金も延滞する金もないのだ。

18歳未満？ ソコはソレだ。

待て、落ち着け横島忠夫。

さて、冷静に考えてみよう。

よこしまくんきょうこのあとひま？

横島クン今日この後暇なら付き合わない？

横島クン今日この後暇なら私と一緒に夜景の見える洒落たレスト
ランで食事でもしない？

横島クン私貴方の事が初めて見た時から愛していたの 抱いて

!!

横島クン令子子供は男の子と女の子の二人欲しいな。

「つまり今日から令子は横島令子ーっ!!」

「脳ミソ腐ってんのかこのクソガキーッ!!」

世紀の大怪盗三世を超えたかもしれん俺の全身全霊を込めた愛情表現は美神さんには刺激が強過ぎたらしい。

横島専用と書かれた神通ハリセンなる凶器の一撃によって俺は意識を失った。

ただし、意識を失う瞬間、美神さんの呟いた言葉はしっかりと心に刻み込んでいた。

「なかなかイイ感じねコレ。厄珍もたまには良い仕事するじゃない」

厄珍？

男か？

男なのか？

そーだ、男に決まっている！ きつと2・5頭身ぐらいの胡散臭いエセ中国人っぽい奴に違いない！

厄珍なんて名前の美少女が存在するはずがないのだ。

いや、男だと？ イカン、それはイカン！

美神さんにどこの馬の骨ともしれん奴が近付くなど許せるはずがない!!

俺がああ乳尻フトモモに触れるためにどれだけのモノを掛けて挑んでいると思っっているのだ！

誰にも渡さんぞ!？ 美神さんは俺のモンじゃー!!

「ハイ到着。ここよ」

「ここって……教会じゃないっすか。なんつーか、美神さんとは対極の場所のよーな」

美神さんの運転する車の助手席で目を覚ました俺が連れて来られたのは、御世辞にも立派とは言い辛い、ぶっちゃけボロっちな教会だった。

建物は大きいし、敷地内には庭もある。

都内でこれだけの物件なんて結構な金になりそうだが。なりそうなんだろうが。

素人の俺にも分る。ここに金運はないと。

幸が薄そうと言うか、なんだか色々と薄くなりそう。そんな微妙な雰囲気を感じるのだ。

それに、いつもの俺であれば二人っきりで教会なんてシチュエーションに燃え上がるはずなのだが、どういっわけかこれっぽっちもそんな気にならない。なれない。

「アンタ私をどーゆー目で見ているのかしら？ まあ、確かに色々薄くはなっているみたいだけどね」

「はあ。で、ここに何の用があるんです？ 道具は持ってきてないみたいですけど除霊っすか？ なんか憑いてそうですもんね、ここ」

「そんなワケないでしょ。ここの責任者は超の付く一流のGSなの

よ？ まあ、私も実は貧乏神に憑かれているんじゃないのかって疑った事もあるけど」

そう言っつて美神さんは敷地内を慣れた様子でずんずん進んで行く。俺は置いて行かれまいとその尻を追い掛けた。うむ、今日も実に良い尻だ。

「先生ー？ 唐巢先生ー？ 生きてますー？」

「ドアを開いて開口一番の挨拶がそれっつていいんスカね？」

「甘いわね。ちょーっと目を離れたスキに餓死しちゃうような人よ？」

「GSって儲かるんですよね？」

「先生は超の付く一流だけど超の付く善人でもあるのよ」

「なんのこっちゃ？」

「ん？ 先生？」

「先生つて、美神さんミッション系の学校に通っていたんですか？」

「教会内はボロっちい外観とは裏腹に、想像していたよりも教会だった。」

「ベンチみたいな椅子が並んでいてその先には壇があつて十字架があつてステンドグラスがあつて。」

「違う違う、GSの方よ。資格を取るには研修が必要で、唐巢神父はその時の私の研修先の先生だったの」

ここで研修していたのよ。そう言いながらも家捜しする勢いで先生とやらを探す美神さん。

いや、美神さん？ さすがに椅子の下に人はいないと思うんすけど。

それにしても高校生ぐらいの時の美神さんの先生か。

高校生の美神さん。

女子高生の美神さん。

「ぐびびっ」

イカン。想像したらよだれが。

「アンタねえ、いつかホントに捕まるわよ？」

「おや美神君、久しぶりだねえ」

「お久しぶりです先生。先生もお変わり……元氣そうで安心しました」

「美神君、人の頭を見てから言い直すのは止めてくれないかね？」

「すみません先生。それじゃあ　また薄くなりましたね……」

「言い直すのかね!? そこまでハッキリ言われるとさすがの私も心に来るモノがあるんだよ!？」

勝手知ったる我が家と言うか。

手慣れた様子で戸棚からカップやらなんやらを取り出すと、勝手にお茶の用意をし始めた美神さんにそれじゃあ俺もと付き合いながら二人でくつろぐこと20分程。

眼鏡をかけた男性がやって来た。

人の良さそうな、柔らかな雰囲気を全身から醸し出しているいかにも神父、いかにも善人そうな男性だ。

見たところ40代ぐらいだろうか。

なるほど、確かに薄い。

「まったく、久しぶりに顔を見せたかと思えば。変わらないねえ美神君は」

ずれ落ちた眼鏡を直しながら、やれやれと呟く神父。

しかし、その表情はなんと言うか我が儘を言う娘を困った感じで見守る父親のようにも見え。

美人のねーちゃんに、美神さんに近づく男は基本的に全て俺の敵だが、この神父に関しては認めてやってもいいかなと。何となく俺はそう思っていた。

「君の活躍は聞こえているよ。相変わらず　お金に執着しているようで。変わらないねえ美神君は」

一転してどんよりとした雰囲気呟く神父。その姿を見た俺は“ああ、この人も美神さんに苦勞させられたんだろうなあ”というのが非常によく理解出来た。

そうか。俺が神父に対して敵意を抱かなかったのはこのシンパシ
ーのせいか。

腕を組みながらうんうんと頷いていた俺に気が付いたのだろう。

「ああ、見苦しい所を見せてしまったね。私は唐巢。この教会で
破門された身ではあるが神父をやっている者だ。初めまして横島
君」

「あ、はい。どうも、初めまして横島忠夫です。え〜っと神父は俺
の事を？」

「ああ、美神君から聞いていますよ。面白い助手を雇ったとね」

「はあ」

ニコニコと笑っている神父の様子から、悪くは言われていないよ
うだとは思っているのだが。

あゝ、なんか気になる。気にし出したらひっじょーに気になる。

別に男にどう思われようがかまわんが、美神さんが、あの美神さ
んが俺の事をどう話していたのが気になって仕方がない！！

『先生、実は私バイトの子を雇ったんですよ』

『横島忠夫君。彼って年下なんだけどスツゴクカッコ良くて頼りに
なってる』

『だからお世話になった先生のとこで結婚式を挙げようと思った

んです』

「つまりここから始まる俺と令子のバージンロードーッ!」

「自重と言つ言葉を知らんのかキサマーッ!」

美神さんのハイキックを喰らってぶっ飛ばされる俺。

「ハ、ハハハ……。うん、話に聞いていた通りだねえ……」

あの、神父？

笑ってないで助けてもらえないでしょーか？

あなたの教え子さんに現在進行形で殺されそうなんですが。

ところで美神さん？

わざわざ俺なんかを連れて来て、一体ここに何しに来たんでしょーか？

ああ、今日は“白”なんスね。

きてます。かなりキテます。

結局、美神さんからのシバきは神父が止めに入ってくれるまで続いた。

白。

感動のあまり口に出してしまったその言葉を美神さんに聞かれましたからだ。

おかげで、俺は今こうして呪縛ロープで全身を雁字搦めに縛られて糞虫の如く天井から吊るされていたりする。

当然、頭は下だ。

「あの〜美神さん？ さすがにこの体勢は……頭に血が上ってかなり辛いんですけど」

あ、ヤバい。クラクラしてきた。

俺の切実な訴えを完全に無視して、^{シカト}美神さんは神父と話し込んでいる。

しっかし意外だ。

あの天上天下唯我独尊を地で行く、ドSオーラを振り撒きまくっている女王様な美神さんが。

神父の前ではえらく丸いとゆーか、刺が少ないと毒が少ないとゆーか。

ふむ。こーゆー美神さんもありだな。

しかし、ひよっとして美神さんはあーゆーオッサンみたいなのが

タイプだったりするの？

まさか……年上がタイプなのか？

女はやっぱり年下よりも年上の方がいいの？

……親父のような？

イカン。この思考はイカン！

何が悲しゅーてあのクソ親父のことなんぞを思い出さなねばならんのだ！？

大体、奴はもう日本にはいないんだ！ あのオカンといる以上、どうやったって俺の邪魔が出来るはずがない！！

「そーだ！ 奴はもういない！ 今度こそ、こ・ん・ど・こ・そ！ 俺の時代がやってくるんじゃーっ！！」

「……あの、美神君？」

「いつもの病気ですから」

あ、神父と目があつた。チャンスだ！

助けて唐巢神父ーっ！！

神父なら。神父ならきつと俺のアイコンタクトに気が付いてくれるはず！

あ！？ 目を逸らした！？ ひどっ！！

神の愛は無限ではないのか？ 有限だともいうのかコンチクシヨーッ！！ 神は死んだ！

「それで、今日はどうしたのかね美神君。まさか本当に世間話をして来ただけではないのだろうか?」

確かに神父の言うとおり。一体何しに来んだ美神さんは?

俺なんて、これじゃあシバかれて糞虫にされていただけではないか。今は床に転がされた芋虫だな!

この代償がパンツ一枚ではやっとならんわ!

「え?」

……ちよつと美神さん?

「ああ、ハイハイ。思い出しました。横島クン、ちよつと来て」

「ういゝっス」

何の用だか分からんが、呼ばれたのならば行かねばなるまい。

「フンツフンツフンツ!」

これでも昔は“尺取虫のタダちゃん”と呼ばれた男。
たかが手足を縛られたぐらいで!

「……うわっ、気持ち悪っ」

「アンタが縛ったからでしょーがっ!」

こんのクソ女がゝゝ!

いつかギャフンと言わせちゃうからなっ!!

まあ、それまでこの芋虫視点を堪能させてもらおう。
すべすべのおみ足からバレないように徐々に視線を
あれ、な
んだか目の前が真っ暗に？

「ほんつと馬鹿ね〜。アンタの考えなんてお見通しよ」

ウス。

おみそれしましたおねーさま。だから顔面をヒールで踏み抜くのは勘弁してもらえないでしょーか。

「……大丈夫かね彼。さすがにやりすぎではないのかな？」

「大丈夫ですよ。次のコマ　ゴホン。3分あれば復活しますから」

「……本当に人間かね？」

時々我ながらどーなんだろーなと思うことはあります、はい。

きっかり3分後。

華麗なる復活を遂げた俺を交えて話が始まった。
先日の鬼塚邸のことらしい。

はて？

美神さんの乳をこの手で掴んだ以外に何かあったっけ？

あの感触は良かった。何が良かったって、とにかく実に良かった。当然の如く、今の俺は二人の会話など右から左。そんなふうには脳裏に焼き付けたあの時の感動に思いを馳せていた
ら

美神さんにグーで殴られた。
なぜバレた？ 美神さんはエスパーかっ！？

「胸の辺がゾワゾワしたわ」

「ひどいっ！ 俺はただあの時の感触を思い出していただけなのに
っ！！」

「記憶を失えーっ！！」

「理不尽な暴力の前に信仰の自由は失われたーっ！？」

「……話を続けてよいかね？」

「ハイ」

「……ウス」

口調は穏やかですけど神父、目が笑ってないッス。
怖えー。

温厚な人ほど怒らせると、ってのはマジだったのか。今後はなるべく神父は怒らせんようにしよう。

ん？ 美神さんからのアイコンタクトか？
なにになに“アンタのせいよ”と。
なんとゆー横暴な！

ならば“美神さんのせいでしょうが”と。

“丁稚のくせに生意気な”

アンタはどここのジ イアンか！？

「……話を続けてよいかね？ 次はないよ？」

だから神父怖いですって！

「ふむ、話分かったよ。つまり横島君への靈視を」

「はい。先生にも一度お願いしたいと思ひまして」

「無論構わないよ？ しかし、それならば私でなくとも構わないの
ではないのかね？」

「単純な靈視であれば六道君の方が適任だよ？」

「え！？ ちょ、ちょっと待ってくださいよ！？」

何？ 俺への靈視！？

なんだ？ なんが悪いモノでも憑いているのか！？

馬鹿な、恨み辛みを一身に集めてそんな美神さんじゃあるまいし！
この品行方正な俺にそんなことへの身に覚えなんかないぞ！？

それとも病気か！？ 死ぬのか！？ 俺はひよっとして死んでし

まうのか!?

彼女いない歴17年のまま死んでしまうのか!?

あーんなことやこーんなこと、まだまだやりたい事はくさるほどあるとゆーのにつ!?!?

チクシヨウ、チクシヨウツ!!

そんなんイヤじゃー!

そんなんイヤじゃーっ!!

「だったらせめて子作りだけでもーっ!!」

同じ死ぬなら腹上死ーっ!!

「こんなアホですから冥子に会わせるのはちょっと……」

「おブツ!?!」

黄金の右!?! お約束入りましたーっ!!

「ああ、なるほど。それは……うん。危険だね、周囲が」

「それに他の同業者はどうしても“美神”を前提に見てしまいますから。」

「下手な先入観を持たずに信頼出来る。そんな相手は先生しか知りませんし」

「なら小笠原く」

「イヤです!」

「即答かね。やれやれ」

小笠原？

また知らん名前が出てきたな。

まあ、あの美神さんのものつすこい嫌そうな表情からすると、この話題には触れない方が賢明かな。

「それじゃあ横島君、こっちに来てくれるかな？ ああ、そんなに緊張する必要はないよ」

「いや、でも、ナニか悪いモノが憑いてるとか不治の病とか……」

ホントにそんな宣言されたら泣くぞ！？

「ははは、安心しな」

「色情霊なら憑いてるわね、もうびっしりと」

え！？ マジで！？

「冗談よ。そういう悪い話じゃないから安心しなさい」

「……美神さんに言われたらシャレにならないんですが」

霊能者が言っている冗談じゃないつちゅーねん！

「ふふふっ」

お、神父が俺を見て笑っている！？

「ああ、すまないね。別に横島君の事を笑ったわけではないよ。どちらかと言えば美神君に、だね。」

昔の彼女を知っているだけに感慨深いものがあってねえ」

「先生！？ ちょっと止めて下さいよ！ む、昔の事なんて今はどうでもいいじゃないですか！！」

おお！？

あの美神さんが慌てふためいとる！

「そんな事よりも横島クンの事ですよ！ ほら、さっきから横島クンが待ちくたびれているじゃないですか！」

いや、俺はそんな事よりも昔の美神さんの話の方が気になります。

「ね。待ちくたびれているわよねヨコシマクン？」

「……イエスマム」

分かりました。聞きません。聞きませんから俺の足をぐりぐりと踏みつけるのは勘弁して下さい。

そんなこんなで只今唐巢神父が俺を霊視中。

気分は美術の授業でのモデルだ。

椅子に座ってじーっとしているだけ。
暇だ。

最初は目視で、その後に霊視ゴーグルを持ち出して。

今もこうして熱心に調べてくれている神父には悪いが、暇で暇でしょうがない。

正直言つて男に見つめられても嬉しくもなんともないからなー。あんまり暇だから神父に何か話し掛けようと思ったが、美神さんから送られたブロックサインは“大人しくしている”だった。

ちなみに、美神さんとはブロックサインの取り決めなんてした事はない。時々すげーな俺。

「……ふうっ」

お、やっと終わったのか？ お疲れ様っス神父。

「いや、驚いたね。霊力と生命力は必ずしもイコールではないが無関係でもない。

なるほど、あの異常な回復力にも……納得はしかねるが一応の説明にはなる」

さっぱり分らんですが。それは褒められているのでしょーか、けなされとるのでしょーか？

「臨死体験、それに近いモノを経験した人間がそれまで眠らせていた霊能力を発揮する。」

それ自体はこの業界ではそう珍しい話ではないんだよ」

はあ、そんなもんなんスか。命賭けてますもんねー！

でも、俺はそういう話つてあんまり聞いた事はないですけど？

「残念な事だけだね。この業界ではそういった状況になる人は多いけれど、そこから生還出来た人自体は極めて少ないんだよ」

あゝ、なんか分るような。
俺もあの時は死ぬかと思っただからな。

ん？

あの時？

「そして横島君。美神君から聞いてはいたが、君はその極めて少ない生還者の一人となった」

そういえば、俺はあの時どうやって助かったんだ？

鬼塚の悪霊に喰われかけて……アレ？

なにか魂を揺さぶるような素晴らしい光景を見たような。

「やっぱり覚えてなかったか。ま、横島くんだから覚えていたらいいけど、今頃調子に乗りまくっていただろうし」

「え〜つと、鬼塚アレは美神さんがシバき倒したんじゃない？」

え？

なんスか？　なんで俺を指差しているんですか美神さん？

「鬼塚アレを倒したのは横島くんよ。素手でぶん殴って消し飛ばしちやっただの。」

あの時は火事場のなんとやらかと思っただけだね」

……はい？

「や、やだなー美神さん。俺を煽ってたってなんにも出ませんよ？

あはははは」

俺はただの荷物持ちっスよ？

美神さんにそんな事を言われたら、ほんとに調子に乗りますよ？
未来のゴーストスイーパー横島忠夫とか名乗っちゃいますよ？

「素手で、と言うのは確かに火事場の的なものだろうね。それでも、今の横島君からは平均的な見習いGSレベルの霊力が感じられる。何度も確認したからね、その点は間違いない。私が保証しよう。なるほど、これは美神君の言った通りかもしれない。

少なくとも、つい先日までただの荷物持ちだった。同業者にはそう言っても信じてはもらえないだろうね。

肉体の成長期と霊力の成長期には通じる部分がある。何もしていない今でこれなのだから、適切な指導の元でしっかりと学ぶのならば いやはや先が楽しみでもあるね」

神父まで！？ なんば言うちよるとですか！？

「横島くんには分らないでしょうけどね、この業界では“霊力が高い”ってのはそれだけで一つの才能よ？」

え？

ええっ！？

才能って、いや、だって、俺っスよ？

去年プールでナンパした時にねーちゃん達から“貧弱な坊や”とか“お呼びじゃない”とか“バカ”って蔑まされた俺っスよ！？

そっだ、これはきつと夢に違いない。

こんな漫画の主人公みたいな都合の良い事が俺に起こるはずがな

い！

でなければドッキリだ。

きつと中学の時みたいに“ちょっと良いな”思っていた女友達を家に呼べてヨッシャーと舞い上がっていたらその子は実は親父に会うのが目的でした”みたいないな！！

モテ期が来たと調子に乗って浮かれて舞い上がっていた俺をどん底に叩き落とすために、そのただけに親父が仕組んだあのドッキリ！

親父の浮気をお袋にチクってやった事への報復だからって、実の息子にやっていい事じゃねーだろうがっ！！ 本気で泣いたぞ俺は！！

殺す！

クソ親父の顔を思い出すだけでも腹が立つ！！

あのクソ親父は一度この手で完膚無きまでに叩きのめして地獄に放り込んでやらんと気がすまんっ！！

「ああ、勘違いしないでね。だからって、私は別に横島クンにGSになれって言うっているわけじゃないのよ？

普通の人よりも霊力があるからと言って、必ずしもこの道に進む必要はないし。その程度の原因でなるモノでもないしね」

ハッ！？

イカンイカン。また思考がぶっ飛んでしまった。
落ち着け俺。

美神さん達がどーゆーつもりかは知らんが、とりあえず今はしっかりとお話を聞かんと。

「それに横島くんはまだ高校生だし、この先もつと他にやりたい事がたくさん見つかるでしょうしね。」

「普通の人よりも選択肢が一つ増えた。そう考えておけばいいと思うわ。」

「ああ、そうだね。私とした事が少々配慮に欠けていたようだ。勘違いをさせてしまったのならすまないね。美神君の言う通り別に強制をするつもりはないんだよ。」

「ただね、未青年に対して大人が、破門の身とは言え聖職者が言うべき事ではないとは思っただけれどもね。」

「靈的な事案が急増している今、才能ある人材は一人でも多く欲しいのが協会側としての私の本音でもあるんだ。」

「教会？、ああ、GS協会の方ですか。」

「先生はGS協会のお偉いさんの一人でもあるのよ。」

「ははは、上の方々に比べれば私なんてまだまだペーパーのヒョッコだよ。」

「先程も言ったが横島君、君は肉体的にも靈的にも成長期にあると思われるんだ。」

「アルバイトとはいえ、この業界に関わっている以上、君にも多少はこの道へと進むとする意思があるのではないのかね？」

「あゝ、スンマセン神父。それは過剰評価っす。」

「ぶっちゃけ、美神さんの乳や尻に引き寄せられただけなんです。」

「目の前にきれいなねーちゃんがいる、その人がたまたまGSだっ」

ただけで。将来の事とかもあんまり。

美人の嫁さん貰って退廃的な生活をしたいなー、とか。

それにしても神父って意外と熱血とゆーか、こーゆー面もある人か。

あ、美神さんも目を逸らしてる。

そりゃあ俺のバイトの動機を知ってるもんなあ。

しかし、俺がGSに？

死にかけて才能に目覚めた？

それが本当なら、まあ神父と美神さんの様子からして本当みたいだけど。

俺がこの手で悪霊をぶん殴った？

どう見てもただの手だぞコレ？

んー、なんなんだろうこのモヤツとした感じは。

素直に喜べないっちゅーか、な〜んか腑に落ちないっちゅーか。

俺は別に美神さんみたいに悪霊をシバき倒すのが好きでもないし、そりゃあ金だつて欲しいけど命を掛けてまで欲しいかと言われればNOだしなあ。

神父みたいな熱意もないし。

うん。

考えれば考えるほど向いてないわ。

美神さんの傍で馬鹿やって、時々美味しい目にあつて。

それぐらいでいいんだよね。

ああ、モヤっとした感じはアレか。
作文コンクールで賞を貰ったのは嬉しかったけど、皆の前で発表する事になるから嫌だった。みたいな。

「 ちょっと！ 横島くん！？」

あれ？

なんですか美神さん、そんな驚いたような顔をして。

「 無意識かね！？ 横島君、自分の右手を見たまえ！」

神父も？

右手？

「 あゝ、なんか光ってますね〜」

うむ。手首から先がなんかぼーっと光っておる。

えっ!?!?

「 な、ななななななっ!?!? なんスカこれ！ なんスカこれ!?!?
病気？ 何かの病気ーっ!?!? 」

あ、消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9679y/>

ゴーストスーパー横島 極楽大作戦R!!

2011年12月1日13時55分発行